

性悪という理由で婚約破棄された嫌われ者の令嬢
（心の綺麗な者しか好かれない精霊と友達になる）

ディー(小)

ディーの小さな頃の姿

カリナ

聖女の血筋を持つ令嬢。
母親を亡くし、実父、義母、
義妹全員に虐げられ、
世間に悪い噂を流されている。

ディー(大)

孤独なカリナの前に現れた精霊。
彼女の味方をする唯一の存在。

オリバー

カリナの婚約者。
この国の第二王子。

ルシアン

カリナの初恋の相手。
高潔だと評判の第二王子。

アマンダ

カリナの義母。
カリナを
ひどく嫌っている。

リリア

カリナの義妹。
狡猾な性格で、
いつもカリナを陥れる。

登場人物紹介

Characters

プロローグ 性悪と呼ばれて

「——カリーナ！ 昨夜はよくも恥をかかせてくれたな。まさか、婚約者である俺の誕生会を欠席するとは……！」

半年ぶりに夕食の席に呼ばれた私が食堂へ入ったとたん、罵声^{ばせい}が飛んできた。

見ると、赤毛を逆立てるようにこちらを睨^{にら}みつける、この国の第二王子、オリバー殿下がいる。その青いアーモンド型の眼は私への敵意にかギラギラと輝き、端整な顔は怒りで歪^{ゆが}んでいた。

豪華な料理が並んだ長テーブルには他にも、普段は宮廷の仕事で忙しくしている父と、社交に飛び回っている義母と義妹の姿がある。

既視感のある光景に、私はそつと溜め息をつく。

とりあえず言い返すのは後にして無言で着席し、胸の前で両手を組み合わせて目を瞑^{つむ}った。

信心深い母の教えを受けた私にとって、この大陸で広く信仰される水と豊穡の女神イクス様への感謝は、他の何よりも優先される。

そうして食前のお祈りを終えた私は、おもむろにオリバー殿下に向き直り事実を述べた。

「出席しようにも、殿下からの招待状を受け取っておりませんし、誕生日だと知りませんでした」

すると、すかさず斜め前方から甲高い声が飛んでくる。

「何を言っているの、カリーナ！ 私は確かに手渡しましたよ。だいたいお前が今着ているのは、そのために仕立てた新しいドレスでしょうに。いつもながら言い訳のために平然と嘘をつく、恐ろしい娘だこと！」

事実無根の義母の非難に、父が嫌味ったらしい口調で追隨した。

「どうせ最初から殿下の誕生会を口実に贅沢なドレスが欲しかっただけなのだろう？ いずれにせよ父親として嘆かわしい。わざわざ王都からお越しくださった殿下に向かつて、最初に発した言葉が挨拶でもお詫びでもなく、恥知らずな言い訳なのだからな！ カリーナ、いったいお前はいつになったら、貴族の娘としての最低限度の礼儀を身につけるのだ？」

毎度のこととはいえ、理不尽な言いがかりに呆れてしまう。

病的な嘘つきなのは義母のほうだし、その口車に乗って私に家庭教師を一人もつけず、教育を与えないで放置したのは父なのに。

おかげで大陸の覇権を握るイクシード王国の名門貴族デッカー公爵家の娘として生まれながら、私は身分に相応しい礼儀や教養どころか、一般常識さえ身につけぬまま十五歳になっていた。

「——待ってください」

と、私が反論しかけたとき、遮るように義妹のリリアが泣きそうな声を上げる。

「オリバー様、私の力不足でごめんなさい！ 昨日、出かけるのが億劫だと言う姉に、オリバー様のように素晴らしい婚約者をないがしろにしてはいけないと必死に訴え、出席するようお願いした

のですが……」

計算高いリリアは義母と違い、決して人前では私に露骨な攻撃をしかけてこない。

毎回こうして、いかにも『けなげな』演技をして周りの同情を誘い、巧妙に私を悪役に仕立て上げるのだ。

ゆるく波打つストロベリー・ブロンドの髪に大きな緑色の瞳。庇護欲を誘う幼さを残した愛らしい顔立ちと、小柄で華奢な身体。

そんなリリアの見た目に誰もが騙され、父に至っては最早、溺愛しているとしか言えない。

「おお、リリア！ 相変わらずなんと心優しく、思いやり深いことか」

父は感嘆の言葉と共に愛情いっぱい眼差しをリリアに向けた後、打って変わった憎々しげな目で私を見る。

「比べてカリーナときたら、見た目と同じで心も人間味が薄く、冷たい」

昔から父は母譲りの私の容姿——青みがかった銀髪を「人の髪色ではない」、アイスブルーの瞳を「ガラス玉のよう」、顔立ちについても「人形みたいだ」とけなしていた。

「誰がどう見ても、天使のようなリリアに何一つ罪などない——悪いのはすべてカリーナだ！」

義母は当然ながらオリバー殿下を含め、周りに控える執事やメイド達までもがいつせいに私に非難の視線を注いでいる。

——それはすっかり見慣れたお決まりの光景。

病弱だった母が七歳の時に亡くなり、その一ヶ月後に父が再婚してからのこの八年間。私は義母とその連れ子のリリアの虚言きよげんにより、繰り返しようやって陥おとしれられてきた。

人前で濡れ衣ぬれぎぬを着せられては悪者にされ、一方的に我儘わがまま、性悪というレッテルを貼り続けられてきたのだ。

結果、今では周囲にすっかりそのイメージが定着し、何が起ころうとも最初から私が悪いと決めつけられる。

それだけでなくも現在の公爵家には、義母に忠実でその手先のような使用人しかいない。そうでない者や、少しでも私に好意的な者は次々にクビを切られていったから。

オリバー殿下も二回しか会ったことのない婚約者の私より、仲の良いリリアの話信じる。まさに誰一人味方あてのいない、敵に囲まれた状況。

何を言ったところで無駄どころか、真実を主張すればするほど父は激高し、オリバー殿下の反感を買うだけだ。

ほぼ同じ場面を半年前にも経験していたのでわかっていた。

でも、誇り高かった母の娘として、違うものは違ふとはっきり訂正せねばならない。

『いつでもどんな状況でも、正しいことは正しい、間違ったことは間違っていると、勇気を持って言える人間でありたいの』

生前の母の言葉を胸に、私は再度口を開く。

「何と言われようと、貰もらっていないものは貰もらっていません。このドレスについてもお義母様が勝

手に仕立てたもの。他に入るサイズの盛装がなかったので、選択の余地がなく着てただけです」
さもなければ誰がこんな派手で下品なデザインのものを選ぶのか。

一同を見回して私が言い切ると、そこで父がわざとらしくオリバー殿下に頭を下げてみせた。

「申し訳ないオリバー殿下。悪いのは父親であるこの私だ。どうやら上の娘への教育を間違ってしまったらしい」

義母が父を庇かばうように畳みかける。

「いいえ、旦那様のせいではありませんわ。聖女の子孫であることと美しさを鼻にかけ、常に人の下に見たかりナかりの態度。すべてその身に流れている傲慢ごうまんな母親の血のせいですわ」

自分のことは何と言われても我慢できる。でも母のことは別だった。

「お母様を悪く言うのは止めてください！」

私がつさに義母の暴言に抗議すると、父が忌々いまいましそうに舌打ちする。

「まったく、いちいち私に逆らう反抗的なところまで母親にそっくりだ」

確かに母は何かと父と対立することが多かった。

でも、それは強欲で横暴な父が、領民や使用人などの多くの人を苦しめていたからだ。

「私の記憶にある限り、お母様は何一つ間違ったことをおっしゃってはいませんでした」

それにいくら折り合いの悪かった母に似ていたとしても、父にとつて私は血を分けた実の娘。

なのに、どうしてここまで目の敵かたきにするのか。義母の連れ子のリリアばかり可愛がって私を冷遇するののか。

どんなにこの境遇に慣れてもそれが理解できず、悲しい。

胸の痛みをおぼえながらも毅然^{きげん}と見返すと、私への忌々^{いまいま}しさのせいか父のたるんだ顎^{あご}がぶるぶると小刻みに震えた。

「なんと、強情で生意気な！ これでは、来月から始まる王立学園での生活が思いやられる。この調子でリリアの足を引っ張り続けられないか……！」

父の言う通り、イクシード王国の貴族の子女には十五歳になると王立学園に入る義務がある。

とはいえ、生まれた時からずっと領地のこの城に閉じ込められて育ってきた私は、学園に行かせてももらえるか大いに不安だった。

これまで『お前のような恥ずかしい娘を外には出せない』と、父にいつさいの外出を禁じられ、ごく少ない社交の機会も今回のように義母に悉く潰^{つぶ}されている。

デッカー公爵家主催の集まりもあるはずだけど、父の再婚後は王都の屋敷で行^{おこな}われているらしく、領地に籠^こもっている私は一度も参加したことがなかった。

半年前の私とオリバー殿下の婚約披露パーティーすら、私が嫌がついているという嘘^{うそ}の理由で行^{おこな}われなかったくらい。

もっともそれも、今日のように夕食に呼ばれ、オリバー殿下に苦情を言われて初めて知った。

とにかく今まで異常とも思えるほど、外の世界に出ることも関わることも妨害されてきた。

しかし、父も国の定めには逆らえないらしい。

誕生日が一ヶ月違いのリリアと一緒に、私も春から王立学園への入学が決まっていた。

しかも学園は王都にあり全寮制。

つまりようやく私も人並に教育を受けられる上に、この牢獄のような生活から解放される。

そう考え、胸を弾ませていたとき、義母が大仰に溜め息をつく。

「本当に頭の痛いこと。せっかくリリアが王太子であるルシアン殿下の婚約者候補の一人に選ばれたというのに……！ いいこと、カーリーナ？ 協力してとは言わないけれど、せめてリリアの邪魔をしないでちょうだい」

——まさに寝耳に水の話だった。

私は義母の発言の前半部分の内容に衝撃を受け、思わず持っていたスプーンを落としてしまう。ガチャン、と皿が鳴り、はっとした私は動揺を隠すためにパンに手を伸ばした。

やはり今日も私だけ別のメニューで、目の前に置かれているのはいつもと同じパンと豆の入ったスープ。

義母の数々の捏造^{ねつぞう}の中に私が極度の偏食だというものがあり、毎回出されるのはこの二品のみである。もう何年も肉や魚を見ていない。

でも、他のことと違い、食べ物については文句を言うつもりはなかった。

どんな内容でも日々の糧^{かて}は、神に感謝し大切に味わって頂くべきものだから。

しかし、心が波立ったままで、食事の味がまるでしない。

それでも食べ物を粗末^{そまつ}にはしてはいけないという一心で、私はパンを口に入れては吞み下す。

一刻も早くこの吊るし上げの場から去り、一人になって落ち着きたい。

そんなふうに私が急いで食べている間も会話は続いていた。

「大丈夫。学園でのことは一学年上の俺に任せてほしい。俺が盾となって、カリーナのいじめからリリアを守ろう」

オリバー殿下が胸を叩いて請け合い、リリアが感動したように見つめる。

「まあ、オリバー様はまるで騎士のようですね」

「本当に、頼りになりますわ。オリバー殿下、ありがとうございます！」

「殿下には、重ね重ねご迷惑とお手間を取らせ、申し訳ございません」

義母のお礼に続いてうやうやしく謝罪した父は、そこで声の調子を一転させる。

「いいか、カリーナ、少しでも問題を起こすようなら、即刻領地に連れ戻すからな！」

ちょうど最後のスープの一口を飲み終えた私は、恫喝の言葉に溜め息をついてから、席を立つ。品数と量が少なかったおかげで、素早く料理を食べ終えることができた。

「食事が済んだので、部屋に下らせていただきます」

「待て、カリーナ！」

父が怒鳴って制止しても構わず、私は急ぎ食堂を立ち去る。

そして、ホールを歩きながら、改めて知ったばかりの事実を思った。

「リリアがルシアン様の婚約者候補……」

苦く噛みしめるように咬き、胸が切なく痛んだとき、端にある大型の置き時計が鳴り始める。

ボーン、ボーン、ボーン――

その音に導かれるように、私の心はたちまち八年前に引き戻されていった。

そう、初めてルシアン様と会ったあの日へと――

* * *

忘れもしない、あれは父の再婚祝いのパーティーが盛大に開かれた夜。

城中が祝いの雰囲気包まれるなか、幼い私は、一人取り残されたような寂しい気持ちでいた。

そばについてくれる者は誰もいない。

母が死ぬのを待っていたかのように公爵家に出入りするようになった義母により、生まれたときから世話してくれていた乳母は解雇されていた。

以来、広い城の中に毎日一人で捨て置かれ、私は悲しみと孤独と共に「自分は知らない子ではないか」という不安と疑念を徐々に深めていく。

だからそれを晴らしたくて、その夜、城内にある礼拝堂の祭壇の陰に身を隠したのだ。

そうして、膝を抱えながら、ひたすら祈った。

――どうか、私がないことを誰かが気づいてくれますように。お父様が捜しにきてくれますように……と。

しかし、願ひ虚しく、誰も来ないまま、ただ時間だけが過ぎていく。

やがて、礼拝堂内にある時計が三度目の時打ちの音を響かせ、やはり自分を気にかける者など一

人もいないのだという失望に胸が覆^おわれていた頃。

ようやく扉が開かれる音がして、私は希望に目を見張った。

ところが、祭壇の陰から頭だけ出して覗き見て、すぐに慌てて頭を引つ込める。

なぜなら現れたのが父でも使用人でもなく、陽^ひの光を集めたような金髪と空色の瞳をした見知らぬ少年だったから。

彼が歩いてくる気配に、私は座った格好で膝に顔を埋め身を縮める。

すると、すぐ横で足音がぴたりと止まり、いきなり声をかけられた。

「ここにいたんだね。初めまして、僕はルシアン。君はカリーナだよね？」

顔を上げた私は、天井画から抜け出てきた天使みたいな少年の美貌^{ひびょう}に目を奪われ、言葉を失った。呆然^{ぼうぜん}と見返す幼い私に、当時九歳だったルシアン様はくっつくかない笑顔を向けてくる。

「君が見当たらなかったの、どこにいるのかと思って捜し回っていた。そうしたら、祭壇の裏から布が出ているのが見えたんだ」

どうやらスカートの裾^{すそ}がはみ出ていたらしい。

ルシアン様は私の手を掴み、引き上げるようにして立たせる。そして思いをこめるように両手を握ってきた。

「ちょうど遠方において葬儀には出られなかったけど、デッカー公爵夫人が亡くなった知らせを聞いてから、ずっと娘の君のことが気になっていた……」

気遣う言葉と手の温^{ぬく}もりが、孤独に凍えていた小さな胸に染みる。



思わず涙が込み上げてきたとき――

「大丈夫？ カリーナ」

ルシアン様に優しく問われ、涙と共に堪えていた悲しみが言葉となって一気に私の口から溢れ出した。

「……大丈夫なんかじゃない……今までずっとお母様と一緒にだったのに、私を置いていなくなってしまう……私もお母様がいるところへ行きたい！」

泣きながら訴えると、ルシアン様は「辛いよね」といったん私の気持ちを受け止めた上で、こう言う。

「でも、幼い娘を残していかなければならなかったデッカー公爵夫人は、もっと辛かったはずだ。自分がいなくなった後の君のことを思つて、どんなに無念で心残りだっただろう――」

そう言われた瞬間、私は目が覚める思いがした。

『お母様はいつもそんなに長く神様に何を祈っているの？』

『それはね、カリーナがこの先もずっと健康で元気なまま長生きできますように……そして綺麗な心をつつまでも持ち続け、誰にでも優しく親切にして、皆に愛される存在になりますように、と祈っているのよ』

生前の母はいつも私の幸せを願っていた。

それを思い出し、余計に涙をこぼす私の頭を、ルシアン様が胸に引き寄せてくれる。

刹那、母の温もりを思い出し、私は彼にすがりついて号泣してしまう。

ルシアン様はそんな私の背中に腕を回してぎゅっと抱き締めると、涙がおさまるまですつとその状態でいてくれる。

さらに時間の許す限りそばに付き添ってくれた後、別れ際に、こう言つて力づけてくれた。

「カリーナ、そばにいらなくても、お母さんはいつも天から君を見守っている――どうかそのことを忘れないで」

私にとって、今でもその出会いの記憶、貰った優しさと言葉は、大切な宝物になっている。

そして、夢のように現れ、悲しみと孤独を癒やしてくれたルシアン様は、初恋の王子様だった。

以来、残念ながら顔を合わせる機会はなかったものの密かに彼との再会を夢見てきた。

王立学園に入学できれば二歳年上の彼と再会できると、十五になる日を心待ちにしていたのだ。

――ところが半年前、夢見る期間は唐突に終わりを迎える。

「喜ばなさいカリーナ、あなたとオリバー殿下との婚約が決まったわ」

義母にそう告げられた瞬間、私はすぐに現実のことだと呑み込めなかった。

「……私が……婚約……？」

「そうよ、なんとこの国の第二王子とね。遠い昔にたった一度、聖女を輩出しただけの血筋が役に立ったわね」

母方の家系――ファロ家は、遙か昔イクス神殿を建立したという偉大なる祭司の一族。

かつてその権勢は「イクス教」が広まると共に増してゆき、最盛期には王をも凌ぐ力を持ってい

た。そう城の図書室にある歴史書には記されていた。

しかし子孫に恵まれず衰退してゆき、今では義母に限らず多くの者にとって「聖女の出身家系」程度の認識になっている。

「ああ、思い出すわ。十六年前、そのありがたい血を欲した公爵家によって、愛し合っていたあなたのお父様との仲を引き裂かれたことを……その後、四十も年上の老伯爵に嫁がされた私と違い、カリーナ、あなたはなんて幸運なのでしょう」

恨み言混じりに義母はそう言ったが、私にとってそれは嬉しいどころか「初恋の終わり」を意味する、辛い知らせだった。

婚約者がいる身で他の男性を慕い続けるなど許されない。

そう思った私はその日、ルシアン様への恋心を断ち切る決心をした。

でも、どうしてもうまくいかない。

いくら考えないようにしても、ルシアン様のことばかり頭に浮かんでしまう。

婚約話を聞かされただけで、こんなにも心が乱される。

依然、私の中でルシアン様への想いは大きいままだった。

でもそれは考えてみれば仕方ないこと。

私にとってルシアン様の存在だけが、長く心の支えだったのだから。

この八年間、周囲からの酷い仕打ちに耐えられたのもルシアン様のおかげだった。

* * *

辛い記憶が蘇ると共に、はっと物思いから覚め、私は急ぎ自室に戻る。

そして中に入るなり扉に鍵をかけ、真っ先に部屋を留守にしたときの習慣——壁の鏡板を一枚はがして奥に隠してある母の形見の無事を確認した。

それは渦巻く波をかたどった凝った細工の銀の髪留め。

たった一つだけ残された私の宝物だった。

他の大切なものは、義母やリアアの命令を受けたメイドによって全部奪われている。

ベッドの下に隠そうと、服の下に身につけていようと気づかれ、それで終わりだった。

そのトラウマから、これだけは守りたくて、決して持ち歩かず、慎重に部屋に隠すようにしている。

髪留めを見てほっとした私は、ようやくけばけばしいドレスを脱ぎさり、室内にいたときの定番の格好——シュミーズ姿になった。

私が持っている服はすべて義母に押し付けられた悪趣味なもので、下着でいるほうがましなのだ。

室内にある調度品に関しても一見数多く豪華だが、物置代わりに使わなくなったものを詰め込んでいるだけ。

だから、いつさい未練はなく、ほぼ身一つでここから出ていける。

家具は王立学園の寮に備え付けのもので充分だし、服も制服があるのでほとんどいらない。

問題があるとしたらものより、私自身の知識や経験不足だろう。

それでも新生活への不安より、期待のほうが圧倒的に上回っていた。

母を亡くして以来ずっと人の温もりに餓えていた私にとって、新しい環境で一から人間関係を築けることが特に嬉しい。

入学までの日数を指折り数え、期待に胸を膨らませる。

——学園に入ったら、お母様の願いを叶えるためにも、たくさん友達ができるように頑張ろう。

「できれば、お互いをわかり合えて、心が通じるような相手と出会えるといいな」
一番の願いを口にしながら、やはり脳裏に浮かんだのは、幼い私の悲しみに寄り添ってくれたルシアン様の顔だった。

あの口貰った優しさと言葉に、これまでどんなに救われ、励まされてきたか。

たとえ恋心は明かせなくても、いつかそれだけはルシアン様に伝えられるといいなと願った。

第一章 学園生活の幕開け

待ちに待った王立学園への移動は、入学式の前日。

リリアやメイド達が乗用馬車なのに対し、私は幌付きの荷馬車に乘せられての出発となった。

それでも、生まれて初めての外の世界と旅は新鮮で楽しく、リリアの衣装箱や家具に囲まれての窮屈な長時間移動も苦にならない。

これまで領地の城の中庭しか外に出たことがなかった私は、後ろを流れていく景色を見ているだけでも飽きなかった。

ただ、昼過ぎに出たので王都に入る前に日が落ちたことが寂しい。

目的地である王立学園の高い鉄柵門に囲まれた広大な敷地に入ったのは、辺りがすっかり夜闇に包まれた頃だった。

旅行鞆を持って寮の前に降り立った私は、期待に胸を高鳴らせながら、ついに新居に足を踏み入れる。

——そして、そこでさっそく厳しい現実を突きつけられた。

待ちかねていたように玄関ホールに並んでリリアを出迎えるたくさんの令嬢達。彼女達から冷やかな眼差しと聞こえよがしの噂話を向けられる。

「リリアさん！ 良かった。到着が遅かったので心配しておりましたわ」

「ええ、また新しい怪我を負わされたのではないかと」

「ねえ、その方が例のあなたをいじめる底意地の悪いお姉様？」

「聖女の血筋が聞いて呆れるわ。虚言癖に癪癪と暴力だなんて最低ね」

建物に入ったとたん令嬢達からいきなり中傷された私は衝撃を受けて固まった。

底意地が悪いのも虚言癖があるのもリリアのほうだし、暴力なんて私は一度もふるったことはない。

わざと怪我して私にやられたふりをするのはリリアの常套手段。入寮がぎりぎりになったのも、私と違って持ち物が膨大なのに荷造りしないで遊び回っていたリリアのせいだった。

呆気を取られて言葉も出ない私をよそに、リリアは「私は何ともありませんわ。心配かけてごめんなさい」と、寄せられた声をいったん受け止めた上で、得意のけなげな演技で皆に訴える。

「でも、どうかお願い！ カリーナお姉様のことを悪く言わないで。いつも説明しているようにお姉様にそうさせてしまう、欠点が多く未熟な私が悪いの！」

「いいえ、いいえ、リリアさん！ お話を聞いても、あなたに一片たりとも非があるとは思えませんが」

「そうよ。どれについてもあなたのお姉様の仕打ちは、理不尽極まりないもの」

「とにかくこれからは、私達がそばについてお守りしますからね」

「ええ、お任せになつて」

そう宣言した瞬間から令嬢達はリリアを取り囲み、牽制するように私を睨んで移動していった。

一人取り残された私はいえ、玄関扉を背に呆然と立ち尽くすばかり。

自分の置かれている状況を思い知らされると同時に、今まで呑気に浮かれていたことが急に恥づかしくなった。

少し考えればわかることだったのに。

頻繁に社交の場に出かけ交友を広げていたリリアには、学園にも知人や友人といった味方が多くいて当然。

そして今までのやり口からして、事前に私を貶める印象操作——虚言と演技を交えた周囲への根回しをしていないほうがおかしい。

つまり私は入学前からリリアによって多くの敵を作られ、孤立していた。

精神的なダメージのあまりその晩は夕食をとり損ね、空腹も手伝って最悪な気分を迎えた翌朝。入学式に出るために制服を着た私は、重い足取りで朝食をとるために食堂へ向かった。

しかし、入寮時に渡された館内図を頼りに迷いながら着いたそこには、なぜか生徒の姿がない。場所か時間を間違ったのかと焦りつつ、おずおずとカウンター越しに調理場へ声をかける。

「あの、朝食をお願いできますか？」

すると、食事が載ったトレーを差し出しながら、調理人が不思議そうな目で見てきた。

「あの、どうしましたか？」

「いえ、生徒さん自ら食事を取りにくるのは珍しいのと、皆さん朝は忙しいので部屋で食べる方がほとんどだから」

どうやら私以外の寮生にはみな使用人がついていているらしい。それも道理で、王立学園は貴族学校だけあり、生徒一人につき世話係を一人だけ寮へ連れてくる事が許されていた。

とはいえ、私は子供の頃以来お付きのメイドのいない生活を送ってきたので、自分のことは何でも一人できる。

逆に、常に入念に着飾っているリリアは、複数の手伝いの者なしには支度ができない。

だから公爵家から二名メイドが同行していたが、両方ともリリアについていた。

でも、それについては不満に思うどころか願ったり。

今まで散々痛い目に遭わされてきたので、義母の下僕であるメイドが近くにいると、私は全く気が休まらない。

食事にしても配膳なんかより寛げるほうが重要。一人で食べるのにも慣れている。

私はさっさと朝食を済ませた。

それより問題なのは、学園に来たばかりで右も左もわからない状態なのに、頼れる相手が一人もないこと。

どうもリリアのせいで、すでに私の悪評がかなり広まっているらしい。

昨夜、遅れて対応に出てきた寮監の先生も、部屋まで案内してくれた寮監生の先輩も、私に対し

て極めて塩対応。とても質問や相談ができる雰囲気ではなかった。

幸い、登校については、王立学園の校舎がお城のような外観で寮からでも目印の高い尖塔が見えたので、一人でも迷わずに済む。

ただし向かう途中ですでに、周りから遠巻きに見られている感じがした。

気のせいだと思いたくても、学園へ到着し、人でごった返した玄関ホールに入ったとたん、いっせいに視線が集まり、さっと近くから人波が引く。

あきらかに悪い意味で注目され、皆から敬遠されている。

その状態は入学式が始まるまでの待機場所である教室でも同じ。

あちこちから視線を感じるのに、誰も目を合わせようとしてくれない。

唯一の救いは家の序列で分けられる寮と違って、クラスがリリアと違うこと。

しかし、クラスメイトの中に昨日寮の玄関ホールで見た顔が二つあって、待ち時間の間、彼女らを中心に複数の生徒が輪になり、こちらを見ては何やら話していた。

内容は聞こえなくても昨日の経験から察せられる。

それこそ初対面の名前すら知らない多くの人達から、すでに誤解されて引かれているという辛い現状。

これでは友達を作る以前の問題で、ましてや『皆に愛される』という母の願いを叶えることなど絶望的に思える。

期待したぶん落胆は大きく、すっかり肩を落として参加した入学式。

高い円天井の大聖堂のようなホールで、大勢の新人生仲間と一緒に整列しながらも、私の心は領地にいた頃のような孤独感に包まれていた。

ここでも私は一人ぼっちで、周りから腫れ物扱いされるのか……

そう思うと、学園長の話を聞きながら、無性に泣きたくなった。

——ところが、そんな暗く沈んだ気持ち、次の生徒会長との挨拶の段になって一変する。

なぜなら学園長と入れ替わり、まばゆい金髪を靡かせながら壇上に現れたのが、ずっと再会を夢見てきたルシアン様だったのだから。

彼が皆の前に立つてこちらを見下ろした瞬間、圧倒的な美貌と存在感から放たれるオーラにより、会場内の空気がずっと変わった気がした。

私は思わず呼吸も忘れ、すっかり成長したルシアン様の凛々しいお姿に見入る。

離れた位置からでもわかる気品を増した端麗な顔に、均整の取れた長身の体軀。

会場を見下ろす水色の瞳からは、かつては感じられなかった強い意志力が伝わってきた。

久しぶりに会えた感動と懐かしさで胸が熱くなり、冒頭の挨拶がまったく耳に入らない。

幼い日のように彼に見惚れる私の前で、王太子であるルシアン様は、将来の王に相応しい自信に満ちた態度で演説する。

「——このイクシード王立学園は歴史が長く、数百年前、国の特権階級である王族や貴族の子女を教育する機関として設立された。特権には必ず義務が伴う。ゆえに、それを果たせる力量と器が必要だ。この学園ではそれを身につけて育てるための最高の教育を受けることができる——とはいえ、

当然ながら、学ぼうとする姿勢が必要だ……どうか新入生の皆さんには、学園生活を送る上で常に身分に相応しい高い意識と誇りを持ち、学業や武芸を修めることはもちろん、その器となるべき人格も磨いてほしい。この栄えあるイクシード王国の未来は、皆さんの肩にかかっているのだから」ルシアン様から贈られた激励の言葉に、私はかつてのように目が覚める思いがした。

——そうだ。学園は友達を作りに通うところではなく、自分を成長させる学びの場なんだ。

いきなりリリアによって孤立させられ、公爵家にいた頃と何も変わらないと思っていたけれど、全然違う。

ルシアン様がおっしゃるように、ここでは最高水準の教育を受けられる。

今は何も持っていない無価値な私でも、知識や技術を学ぶことで、国や人のために役立つ能力が得られるだろう。もしかしたら将来、ルシアン様のお役にも立てるかもしれない。

何よりこうしてルシアン様と同じ空間にいられ、遠くからだとしてもお姿を目にする機会が得られる。

改めて学園へ来られて良かったと、感動の思いでルシアン様を見上げていたとき、話しながら会場を見回していた彼と目が合った。

瞬間、また呼吸を忘れ、時が止まった気がした。

そのまま水色の瞳から目が外せなくなり、動けないでいると、ルシアン様が先に、はつとしたように視線を逸らす。

もちろん距離が離れているし、私の気のせいというか、願望が見せた錯覚だと思う。

それでもその後、もう一度確認するように見られたときには、感激で全身の血が沸騰しそうになる。

そうして熱くときめいた胸を抱え、ルシアン様を見つめながら、私は考えずにいられなかった。好きになつてほしいなんて贅沢は望まない。でもせめて嫌われたくない。

きっとルシアン様も婚約者候補のリリアか弟のオリバー殿下、あるいはその両方から、私の悪い情報を聞かされているはず。

でも、もしそうだとしても、ルシアン様の誤解だけではどうしても解きたい。

少なくともこの八年間、私はルシアン様の励ましの言葉を胸に、天から見守ってくれている母に恥じぬよう、その教えを守って生きてきた。

憎しみや恨みで心を濁さないように、義母やリリアに攻撃されても仕返しなど考えず。常に人として正しくあろうと、父になじられても根気良く真実を訴え続けてきた。

母の教えを守り、毎日イクス神への感謝と祈りを忘れず、人として正しくあろうとしてきたのだ。何より、イクス神への感謝の心を決して忘れず、この八年間ひたすら祈りの日々を送ってきた。

* * *

その日の昼休みも私は一人で過ごしていた。

寮や学園はもちろん、クラスでも相変わらず皆に避けられており、誤解を解く機会がなく、孤立

したまま。

心の慰めを得ようにも、上級生とは校舎が別棟だからか、入学式以来、ルシアン様を見かけることもなかった。

そんな私にも心癒やされる場所がある。

水の女神を信仰するイクシード王国だけあり、学園の敷地内は水で溢れかえっているのだ。

噴水や壁滝、水盤、池など、水のある場所が多く、生まれ育った領地の城の中庭には水場があった私にとって嬉しかった。

中でも特に生徒達に人気の憩いの場となっているのは、中庭にある巨大なイクス神像が中央に設置された縁が円形の噴水。

ただし、そこは人が多く集まっているので、周囲から白い目で見られている私には落ち着かない。一方、リリアは顔が広く、男女問わず人気者らしい。

見かけるたびに複数人に囲まれていて、その中には男子生徒も多かった。

憂鬱なことにリリアの友人達は皆私を敵視しているらしい。通りがかりに色んな生徒から睨まれる。

そういった理由で、なるべく人目につかない場所がないかと探して見つけたのが、この聖女像と水盤が置かれた裏庭。

ここは校舎の陰になって日当たりが悪く、じめじめしているせいか常に人がいない。

本日も私一人の貸し切り状態だった。

私は水盤の正面にあるベンチに腰かけ、膝の上に敷いたランチョンマットに購買で買ったパンと水の入った水筒を並べる。

公爵家からの仕送りは極めて少なく、学食で昼食をとる金銭的な余裕はない。初日に下見に行ったときは、料理の値段の高さを見てびっくりした。

幸い、購買で売っているパンはそれほど高額ではなく、計算したところ毎日一個ずつ買えて、少しお釣りが出る。

飲み物に関しては買う余裕はなかったものの、朝食のついでに食堂で水筒に水を入れてもらうことができた。

なくなれば学園の水汲み場で足すことができるので、不自由はない。

栄養についても、朝晩寮で食事が出るので、公爵家にいた頃より総合的に取れていた。

「イクス神様、今日もお恵みをありがとうございます」

私は今日も心から感謝を込めて、食前のお祈りをする。

それからパンを細かくちぎり味わって食べながら、正面にある聖女像を眺めた。

青銅製の聖女セリーナ像は伝説の一つを再現し、水盤に手をかざすポーズを取っている。

母にそっくりなその面差しを見つめ、私はメイドに勝手に処分されるまで繰り返し読んでいたお気に入りの本『聖女セリーナ伝』の内容を思い起こす。

それによると、聖女の能力は生まれつきのもではなく、イクス神が相応しいと思った乙女を選んで加護を与えることによって出現するらしい。

もちろん聖女セリーナもその例外ではない。

当時、大陸には長い干ばつが続いており、作物の不作による飢饉と疫病が蔓延し、食料を巡る争いが絶えなかったという。

イクシード王国も例外ではなく、貧しさと飢えで人心が乱れ、国内の治安は悪化、宮廷内でも毒殺が横行し、神への信仰は地に落ちていた。

聖女セリーナも戦乱に巻き込まれ早くに両親を亡くし、頼るべき叔父である大神官も毒殺される。それでも彼女は決して神への信仰を忘れなかった。

神殿地所内にあるイクス神像が設置された『祈りの泉』の前で、来る日も来る日も雨乞いした。

時には自分のぶんの食料さえも他人に差し出し、何日も水しか飲んでいない状態であっても。

そしてついある日、彼女は願いが聞き届けられるように泉が輝きだし、そこから生まれた光が天上に向かって立ち昇っていくのを見た。

やがてその光が天に到達すると、雨雲が起こり、念願の雨が降り始める。

これが聖女セリーナが行った最初の奇跡であり、神の加護を得たと判明した瞬間でもあった。

以降、彼女は次々と奇跡の御業を行い、水不足だけではなく、水鏡を使った未来予知と過去見によつてあらゆる問題を解決する。

そうやってこのフレンシア大陸に長きに亘る平和をもたらしたという。

まさに義母がいつか言ったように、三百年前たった一人だけ一族に現れた奇跡の存在。

そんな偉大な先祖の伝説に思いを馳せているうちに、先日言われた『聖女の末裔が聞いて呆れる

わ』という言葉が蘇^{よみがえ}り、私は彼女の子孫として不甲斐^{ふがい}ない気持ちになった。

思わず食事の手が止まり、暗い気持ちで聖女像を見つめる。

「ここにいたのか、カリーナ。捜したぞ！」

不意に大声がして、鼓動が大きく跳ねた。

恐る恐る目を向けると、赤毛を靡^なかせ大股で歩いてくるオリバー殿下の姿が見える。

それを確認した私は、悪い予感に襲^襲われた。これまで彼が私に会いに来るときは、必ず文句を言うためだったから。

内心でリリアの差し金かと疑い、警戒しながら尋^{たず}ねる。

「……オリバー殿下……私に何かご用でしょうか……？」

すると殿下は不満げにふんと鼻を鳴らした。

「用事がないと会いに来ては駄目なのか？ 俺はお前の婚約者なのだぞ？」

「そんなことはありませんが……」

一応否定はしてみたものの、たとえ婚約者であっても会うたびに怒っているオリバー殿下は苦手だった。

兄弟だけあって体格と顔立ちはルシアン様と似ていても、性格は真逆に近い印象だ。

オリバー殿下は地面を踏み鳴らして近くまで来ると、ねめつけるような眼差^{まなざ}しで私を見下ろした。

「まあ、正直言うと、優しいリリアに、お前が毎日一人で寂しそうだから構^{かま}ってあげてほしい、とお願^{ねが}いされて来たのだから」

遅れて理由を説明しながら、いやらしい感じに唇^{くち}を舐^なめ上げる。

異様にニヤついた青い瞳を見返しつつ、私は蛇^{へび}に睨^{にら}まれた蛙^{かえる}のような緊張感をおぼえた。

「それは、お氣遣いありがとうございます——ですが殿下、私は一人でいるほうが落ち着きますし、好きなので、どうかお構^{かま}いなきようお願いします」

できるだけ丁重にお断りする。

しかしオリバー殿下はその言葉を無視して言う。

「もちろんその前にお前をじっくりしつける必要があることはわかっている」

「しつけ……ですか？」

発言者の品性と人格を疑うような表現だった。

怪訝^{けげん}に思^{おも}って問^とう私に、彼は口元に下卑^げた笑いを浮かべ、いかにも愉快そうに答える。

「ああ、そうだ。従順さと可愛げというものをこれから時間をかけ、じっくりお前に教え込むつもりだ」

勝手な宣言に思わず背筋がぞわっとした。

私は身を強張^{こわば}らせて抗議する。

「私は、犬や猫ではありません！」

「ほらほら、カリーナ、そういうところだ」

指摘するように言^いって、オリバー殿下が手を伸ばしてくる。

「きゃっ……」

いきなり肩を掴まれそうになった私は、反射的にベンチを立てて避けた。
ところが、長い髪の端を掴まれてしまう。

「……うつ……!？」

痛みにもめく私の髪を拳に巻きつけ、オリバー殿下は強引に引き寄せる。

「お前のこの絹糸みたいに艶々した髪も、人形じみたお綺麗な顔も悪くはない。つまり問題はその腐った性根と生意気な性格だけだ。婚約者として意地でも矯正してやろうじゃないか」

「痛いっ、離してください!」

悲鳴まじりに懇願しても、逆に手の力をこめ、無理やり私をベンチに引き戻す。

そして「座れ!」と怒鳴りつけ、肩を掴んで上から押さえつけると、彼はドン、と勢い良くベンチの背もたれに両手をついた。

男性の大きな両腕と身体で囲い込まれた私は、突然の痼癪と暴力への混乱もあいまって固まる。

オリバー殿下は、そんな私の鼻先につきつけるようにぐいっとな顔を寄せ、苛立った様子で叫ぶ。

「いいか、カリーナ。お前には俺に氣に入られるように努力する義務がある。なぜならお前から望んだ俺との婚約なのだから!」

婚約パーティーの件でオリバー殿下に苦情を言われた際に知ったが、なぜかそういう話——私が見初めて婚約を希望したことになっているらしい。

でも、母が生きていた頃、つまり生まれたときから外出をいっさい禁じられていた私は、それが彼と初対面。

有り得ないと何度も説明したのに、先月の誕生会の件と同様、義母とリリアの演技によって逆に嘘つき呼ばわりされた。

「……以前も申し上げましたが、私はあなたとの婚約など——」

希望したことなどございません……と言いつつ終わる前に、大きな手でパシン、と頬を引っぱたかれる。

「きゃっ!」

瞬間、痛みより衝撃で勝手に目に涙が滲んだ。

私は頬を押さえ、信じられない思いでオリバー殿下の顔を見上げる。

「……何を、するんですか……!？」

「まずは口答えしたらどうなるか、わからせてやらないとな」

「暴力なんて最低だわ!」

非難するとすかさずまた手が伸び、逆の頬を激しくぶたれる。

「……っ!？」

今度はパチン、という先ほどより鈍い音が響き、ぶたれた箇所から焼けるような痛みが広がった。どうやら言い返すたびに頬を打つ気らしい。

そう悟った私が無言で震えていると、オリバー殿下は盛大な溜め息をついた。

「なあ、カリーナ、わかってくれ。俺だつてできればこんな方法は取りたくない。でもリリアが強情なお前には口で言っても無駄だと、親切に教えてくれたのだ」

「リリアが……？」

「ああ、そうになると、身体に教え込むしか手段がないだろう？ だからこれは仕方がない行為なんだ」

あくまでもリリアの助言に従っただけで「自分は悪くない」と主張したいらしい。呆れた言い草に私は言葉を失う。

たとえリリアにそのかされたのだとしても、暴力行為を他人のせいにして正当化するなんて人間性が最低すぎる。

——こんな性根の腐った人が私の婚約者だなんて。

込み上げてくる激しい嫌悪感と共に、私の中で一つの記憶が蘇る。

『お母様はお父様が嫌いだから毎日喧嘩しているの？』

幼かった私がある日尋ねると、母はきっぱりと答えた。

『いいえ、カリーナ。決してそうじゃないわ。自ら望んだ結婚でなかったとしても、縁あって夫婦になったんだもの。お父様に良くなつてほしいと思えばこそ、厳しいことを言っているの。私だつてできれば無用な争いはしたくない。お父様が間違つても口を閉ざし、逆らわず大人しく従つていれば争いにならず、丸くおさまることもわかっている。でも、それは決して相手のためにならないことよ……何より私は聖女セリーナのように、いつでもどんな状況でも、正しいことは正しい、間違つたことは間違つていると、勇気をもって言える人間でありたいの』

暴力の有無はあれど、まさに私が今置かれている状況は母と同じではないか……

母は人として輕蔑に値する父を最期まで根気良く論し続けていた。

あの日、母が言ったように、逆らわなければ、口を閉ざしていれば、争いにならず、暴力もふるわれない。

でもオリバー殿下は間違っている。

私は勇気をふるって毅然と顔を上げ、震える喉から声を絞り出した。

「……ぶちたいなら何度でもどうぞ、暴力で人の心は支配できません」

覚悟を決めて言い切ると、オリバー殿下は逆上するどころかニツと笑い、自分の襟元を緩め始める。

「ふん、何も身体に教えるというのは、暴力に限った話ではない」

遅れてその発言の意味を察した私は、慌ててその場から離れようとした。

ところが、阻むようにバツと前側から抱きつかれ、そのまま芝生の上に押し倒される。

「いやっ！」

必死に起き上がろうとしたものの、肩を押さえつけられ、腹の上に馬乗りになられてしまう。

オリバー殿下は跨った状態で私の襟に手を伸ばし、性急な手付きでボタンを外すと、ぐいっとブラウスの前を開いた。

「きやつ」

胸元をはだけられた私は、生まれて初めて男性に下着を見られた羞恥心と恐怖で視界が赤くなる。このままでは力づくで純潔を奪われてしまう。

瞬間的にそう悟ると同時に、こんな男に汚されるくらいなら、舌を嚙んで死んだほうがまだと思った。

しかし、いくら死にものぐるいで身をよじり手足を動かそうとも、大柄なオリバー殿下の身体の下から抜け出ることは叶わない。

「誰か、助けて！」

「静かにしろ」

「んぐっ……！」

挙げ句、助けを呼ぼうとした口を大きな手で塞がれ、絶望に目の前が真っ暗になった——まさにその時だった。

「いったいそこで何をしている？」

凜とした声が裏庭に響き、誰かが駆け寄ってくる気配がする。

なんとか首を動かし確認した私の視界に映ったのは、まばゆい金髪を靡かせる際立った長身の男性——ルシアン様の姿だった。

オリバー殿下はびくつと動きを止め、ぎょつとしたような目をそちらに向けて叫ぶ。

「兄さん……！」

「カリーナ嬢から離れろ！」

走りながら状況を判断したらしいルシアン様が、鋭く怒鳴りつけた。

オリバー殿下があたふたした様子で苦しまぎれの言い訳をする。

「待ってくれ、兄さん、勘違いしないでほしい。これは単なる婚約者同士のじゃれあいであって……」

口を手で塞がれている私は否定の意思を示すために「うーっ、うーっ」と唸り、激しくもがいてみせた。

「とにかく、離れろ！」

「わかったよ」

目前に迫る兄の剣幕に気圧され、オリバー殿下が慌てて立つ。

ようやく口が自由になった私は、間髪容れずに叫んだ。

「オリバー殿下が、襲ってきたんです！」

「ごっ、誤解だ。兄さん、カリーナの奴から誘ってきたんだ。こいつの性質の悪さは兄さんも耳にしているだろう？」

焦って弁解するオリバー殿下を無視して、ルシアン様はさっと膝を落とし、私を優しく助け起こしてくれる。

「大丈夫か？ 頬が赤い」

それからキツとした目を向けて問う。

「お前がやったのか、オリバー？」

さすがに誤魔化しきれないと思ったのか、オリバー殿下はとっさに嘘をついた。

「カリーナが俺を侮辱するから、ついカッとなって……」

ルシアン様が美しい眉根を寄せ、はーっと長い溜め息をつく。

「オリバー、貴様、王族としての恥を知れ！ この状況でどんな言い訳も通用するものか！ 男としても女性に暴力をふるうなど絶対に許されないことだ。ましてや欲望にまかせて襲うなど、極刑に値する！」

「極刑！」

オリバー殿下は裏返った声で叫び、言い募る。

「兄さん、信じてくれ。俺は断じてカリーナを襲ってなどいない。だって、俺達は婚約者でいずれ結婚するのに、どこにそんな必要がある？ そうだ、こいつが俺を煽って、わざと怒らせたのも、誘ったくせに襲われたふりをするのも、全部こうして俺を罠にはめるためだったんだ！」

そして、いかにも今気づいたというように、ポンと手のひらに拳を打ち付けた。

自己正当化もここまでくると見苦しい。

私は呆れて言葉も出なかった。

ルシアン様がうんざりしたように叫ぶ。

「もう黙れ、オリバー！ そこまでで充分だ——あとの詳しい話はカリーナ嬢から聞こう」

「待ってくれ兄さん、カリーナから話を聞く必要なんてない！ そいつには虚言癖がある！ デッカー公爵夫妻も妹のリリアも、家族皆がそう言っている」

「いいからもうどっかに行け！」

「わかった、わかった」

ルシアン様の怒りの声に、オリバー殿下は諦めたように両手を上げ、逃げるように退散していった。

ようやくルシアン様と裏庭で二人きりになり、私は遅まきながらお礼を言った。

「助けてくださってありがとうございます。ルシアン殿下」

しかし、ルシアン様はなぜかこちらを見ないように顔を背けている。

「まずは胸元を直してくれ」

指摘された私は、恥ずかしさに頬を熱くして再びしゃがみ込み、ブラウスの前を閉じた。

「……直しました」

報告すると、ルシアン様は振り返って確認してくる。

「怪我はないか？」

「はい、たぶん」

曖昧な返事をする私に、彼は観察するみたいに真剣な眼差しを向けた。

「膝から血が出ている。医務室へ行こう」

「大丈夫、軽い擦り傷です」

「ダメだ。さあ——」

ルシアン様は有無を言わさぬ口調で言っ手を手を掴み、いつかのように引き上げるように私を立ててくれる。

とたん、懐かしい温もりに鼓動が激しく高鳴った。

「頬も冷やしたほうがいいな」

ときめく私の気持ちも知らず静かに呟き、彼はそのまま手を引いて歩き始める。

そんなルシアン様を強く意識しながら、私はといえばもう胸がいっぱいで、移動中ずっと話しかけることができなかった。

もちろん、危機に駆けつけてくれたことや、こうして間近で会えたことも感激している。

けれど何より、ルシアン様は迷わず私の名前を呼んでくれた。

八年前たった一度会っただけなのに、覚えていてくれたことが嬉しくてたまらない。

頬を腫らした私を氣遣ってか、ルシアン様は人気がない経路を通り、誰とも会わずに医務室に着する。

「誰もいないようだな。普段は校医が詰めているのだが——ちょうどいいので、ここで話を聞かせてもらおう」

ルシアン様は私に椅子をすすめた後、歩き回って、次々に戸棚や引き出しを開けては薬品と布を取り出していく。

私はその間、夢心地でぼうっと、その姿を眺めた。

オリバー殿下に襲われたショックか、はたまたルシアン様に再会できたからか。心臓がうるさいままで、なんだか息苦しい。

「さあ、これで頬を冷やして」

濡らした布を私に手渡し、ルシアン様は近くに椅子を寄せて座った。

それから私の膝を手当てしながら謝ってくる。

「先程は弟が申し訳なかった。謝って済むものでもないが」

「そんな、ルシアン殿下に謝っていたく必要なんてありません」

「いや、兄としても同じ王族としても、僕には責任がある。暴力も無体なことも二度とさせない。

そう約束したうえで、何があつたか詳しく聞かせてもらっていいか？ もちろんまだ話すのが辛いなら、後日改めてでもいいが……」

「いえ、大丈夫です！」

力をこめて返事し、私は今日裏庭で起こったことをありのまま、順を追って話して聞かせた。

他の生徒達同様、私への悪い噂を聞かされているはずのルシアン様が、間違ってもオリバー殿下の無茶な言い分を信じないよう、真剣に。

私が説明を終えると、ルシアン様は確認するように尋ねる。

「では君は、リリアがオリバーをそそのかしたと言ったね？」

たとえば、王太子の婚約者候補であるリリアの足を引っ張ることになっても、真実は真実だ。

「はい、オリバー殿下自身が、リリアからそうするようにすすめられたと言っていましたし、これまでずっとそうでしたから。リリアは計算高く嘘が得意で、私は幼い頃からずっと同じような被害を受けてきました」

「……そうか……」

重く頷いた後、彼は美しい顔に憂いを浮かべて嘆息した。

「信じてくれますか？」

不安な気持ちで聞いた私に、率直に答える。

「正直に言う、僕には君と弟のどちらの言い分を信じるべきか、判断がつかない。弟は母に特別甘やかされて育ったせいか、幼い頃から自分の思い通りにならないと癇癪を起こす癖がある——そしてカリナ、君も……」

「私ですか？」

学園に出回っている悪評のことだろうか？

「ああ、デッカー公爵の口から、娘の君を溺愛して甘やかすぎたことを後悔していると、何度か聞かされたことがある」

私は思わず自分の耳を疑う。

「父が……私を……溺愛？」

本気で言葉の意味が理解できなかった。

「そうだ。幼い頃に母親を亡くした君が不憫で、つい、我儘放題させてしまった、と」

「そんなことを、父が……!？」

外面がいいことは知っていたが、まさかそんな娘に甘い父親を演じていたなんて。私は衝撃を受けて息を呑む。

「ああ。そのせいでリリアに無用な我慢を強いてしまったとも言っていた」

その言葉に激しくかぶりを振った。

「ルシアン殿下、それでは話が真逆です！ 父はリリアを溺愛し、私のことを嫌っています！」

ただ信じてほしい一心で声を張り上げる。

「……だが、デッカー公爵だけではなく、夫人もリリアも皆、同じことを言っていた。君一人が嘘をついているのか、君以外の全員が嘘をついているのかという話なら、やはり前者に思える。何より血の繋がらない公爵夫人とリリアはわかるが、デッカー公爵にはそのような嘘をつく理由がない」

ルシアン様には、実の娘を嫌い義理の娘を愛する父親がいることが、想像できないのだろう。

それでも私には繰り返し事実を訴えることしかできない。

「私にもなぜ父が義理の娘であるリリアばかりを可愛がって優先するのかわかりません。でも嘘偽りのない真実なんです！」

ルシアン様は金色の長い睫毛を伏せて静かに首を横に振る。

「すまないが、僕には他人の悪口を言う人間の言葉を信じることはできない。カリナ、君はリリアが計算高く嘘つきだと言うが、僕の前で彼女が君を悪く言ったことなど、ただの一度もないんだ。むしろいつも、妹として家族として、君を庇う言動をしてきた」

そう、それがリリアのいつものやり口なのだ。

決して他人を悪く言わないし、自分が表立って行動を起こすこともしない。常に表面上は同情的な言動を取りながら、結果的に私が悪く思われるように誘導する。

「悪口なんかじゃありません！ 実際にリリアは……！」

なおも言い募ろうとしたとき、私に向けられるルシアン様の水色の瞳に浮かぶ冷たい光——軽蔑の眼差しに気づき、私は続きの言葉が出なくなった。

リリアの本性を伝えれば伝えるほど、家族を罵っていると思われる。

ルシアン様も他の人と同様、私を信じてくれない。口では話を聞くとはいつつ、最初から先入観で私を悪者だと決めつけている。

その事実が気がつき、深い失望が胸を覆ったとき、予鈴が鳴った。

そこでルシアン様が、もう話すべきことはないというように立ち上がる。

「悪いが僕はもう行かねばならない。君の担任には連絡しておくので、落ち着くまでここで休んでいるといい」

言葉こそ優しくかったが、硬く冷たい声だった。

私は背中を向けて歩き出す彼の姿を、悲しい気持ちで見つめる。

「きつとルシアン殿下にはわかっていただけないでしょうね。この世界には想像もつかない悪意や、自分ではどうしようもない、不可抗力の事態があるということを……」

泣くのを堪え、最後にそれだけ言うのがやっとだった。

ルシアン様は扉の前で一瞬立ち止まったものの、振り返らずに医務室を出ていく。

結局、私は自分への誤解を解くどころか、却ってルシアン様の信頼を失ってしまった。

その事実がオリバー殿下に襲われたことよりも、ずっとずっとショックで悲しい。

しかも、悪いことはそれだけで終わらなかった。

オリバー殿下は今回の件でかなり私を逆怨みしたらしい。

翌日、廊下ですれ違ったとき、わざと聞こえよがしの大声で「淫乱な女に陥れられた」と、取り巻き達に笑って話していた。

その様子から、どうやら裏庭での一件を脚色した話を吹聴して回っているのだとわかる。

——初恋の人には軽蔑され、婚約者によってますます評判を貶められるという、辛い状況。私が小さな精霊と出会ったのは、まさにそんな底にいますときだった。

第二章 精霊との出会い

裏庭での事件があった五日後の昼休み。

「ねえ、あの人」

「ああ、リリア様の」

「そういえばオリバー殿下が……」

「信じられないわよね」

今日も周囲からの冷たい視線と陰口に晒されながら、私は生徒で賑わう中庭に来ていた。

オリバー殿下に襲われて以来、人気がないところが怖くなり、教室で昼食を済ませるようにしている。

だから、ここに来たのは純粋にイクス神像に祈るため。

あれからルシアン様と顔を合わせる機会はなかったものの、言われた批判や冷たい眼差しが繰り返し脳裏に蘇ってくる。

加えてオリバー殿下に酷い中傷を流され続け、現在の私の精神状態はこれ以上ないくらい最悪だった。

ルシアン様という心の救いをなくした今の私には最早、神への祈りしか残されていない。

人の邪魔にならない中庭の隅に立ち、悲愴な気持ちで彫像に目を向ける。

噴水の中央の台座に設置された女神イクス像は、左手に手桶を抱えて優しく微笑んでいた。

少し見入ってから両手を組んで目を瞑り、まずはイクス様へ感謝を伝える。それから一心に救いを求めて祈った。

——どうかこれ以上、私の悪い評判が広がりませんように。ほんの少しずつでもいいので、皆の私に対する誤解が解けてゆきますように。

心の中で呟きつつも、ルシアン様の顔がしきりに浮かんで、胸がズキズキする。

——友達がたくさん欲しいなんて贅沢は申しません。でも叶うなら、たった一人でもいいので、私のことをわかってくれる存在が現れますように。

ささやかな、それでいて絶望的に思える願いを伝え、ゆっくりと目を開く。

——その時だ。

視界の片隅。

噴水近くの芝生に咲いている白い小さな花の近くで、チラツ、と光るものが動いた。

一瞬見間違えたのかと思ったが、目の錯覚ではない。凝視すると花陰から漏れる青白い光が確認できる。

私は思わず、ごくつと息を呑む。

あれはもしかしたら、花の精かもしれない。

——それは幼い頃、繰り返し母に読んでもらったお気に入り絵本の中の存在。心優しい女の子が小さな花の精と出会って友達になる物語。

幼い私はその本の影響で、どこかに花の精がいなかったと領地の城の中庭中の花の近くを調べ回ったものだった。

しかし、花壇の花はもちろん、草花まで見て回ったのに、いくら探しても出会えない。

しよげかえった私は母に質問した。

『花の精が現れてくれないのは、わたしが絵本に出てくる女の子みたいにいい子じゃないから？』
『いいえ、絶対にそんなことないわ。カリーナはとっても優しい子だもの。きつと単に、この庭にはいなかっただけよ。カリーナがそのままいい子でいたら、いつかきつと出会えるわ』

そんな母の言葉を思い出し、私は子供の頃のように胸を弾ませる。

ひよつとしたら、イクス神がさっそく私の願いを聞き届け、小さな友達を与えてくれたのかもしれない。

そう思うと、暗く沈んでいた心にはいつと明るい希望の光が差した。

私は逸る気持ちを抑え、慎重に足を踏み出し、花に近づき始める。

その白い花は噴水から数歩程度。

風向きのせいでちょうど噴水の水飛沫がかかる位置に咲いていた。

花の精を驚かさないようにそっと進み、あえて三歩程度離れた位置でいったん立ち止まる。

そして息を詰めて静かに観察した。

やっぱりいる！

ちょうど花の部分で顔は隠れているけど、青白く発光する透けた身体の一部が見えていた。

喜びに舞い上がりながら、私がさらにもう一步、足を進めようとしたとき。

「カリーナ」

いきなり後ろから名前を呼ばれ、心臓が口から飛び出しそうになる。

「ここにいたのか、捜したぞ！」

聞き覚えのあるがなり声におずおずと振り返ると、たてがみのような赤毛を靡かせて歩いてくるオリバー殿下の姿が見えた。

とたん、私は緊張で身を固くする。

その見るからに怒りをみなぎらせた表情から、また何か酷いことをされる予感がした。

オリバー殿下は太股でやってくる、青い瞳で威圧的に私を見下ろす。

「カリーナ、お前、兄さんに俺の悪口を言っただろう！」

いきなりまったく身に覚えのないことを言われ、私はとまどう。

「いったい何のことでしょう？ あれからルシアン殿下とは一度も話しておりませんが」

怪訝な思いで問いながら、ルシアン様の名前を口にしてまた胸を痛ませた。

「見え透いた嘘をつくな！ 俺がお前の下品な悪口を言い回っているという嘘の話を、兄さんに吹き込んだらうが！」

「いいえ、そんなことはしておりません」

仮にしていたとしても真実なので嘘ではない。

「とぼけるな！ 素直に認めて謝れば許してやるものを」

「やっていないものは、やっていません」

「まだ言うか！」

オリバー殿下は苛^{いら}立って叫び、勢い良く私の胸をドンツと突き飛ばした。

よりにもよって、白い花が咲いているほうに向かつて――

「きゃっ！」

悲鳴を上げて後ろ向きに倒れながら、私は焦^{あせ}る。

いけない。このままでは花を潰^{つぶ}してしまう！

とっさに身体を反転させ、どうにか地面に両肘をついて花を庇^{かば}う。

おかげでお尻で花を潰すのは回避できたものの、どたつと派手な音を立ててその場に倒れ込んでしまった。

次の瞬間、前回ルシアン様から受けた嚴重注意を思い出したらしい、オリバー殿下の焦^{あせ}った声が頭上で響く。

「いつ、今のはお前がそうさせたんだ！ 決して俺が暴力をふるったわけではないからな！」

相変わらず他人のせいになっている。そんな言い訳を耳にしつつ、私はおそるおそる身体の下を覗き込み、ほっとした。

――良かった、花は無事みたい。

見たところ花びらにも茎にも葉にも傷ついている様子はなかった。

確認して、涙が出そうになる。

絵本に出てくる花の精は宿っている花が枯れると死んでしまうのだ。

ひとまず安心した私は、次に花の横にちょこんと立っている精霊に目を向ける。

まん丸の顔にきよとしたつぶらな瞳。

大きな頭に、お腹がぼっこりした胴体、そこから突き出た小さな手足。

絵本の花の精と違って羽はなく、花びらのスカートも穿^はいていない。

ほぼ裸であることといい、まるで生まれたての赤ちゃんのような見た目だ。

とにかくとても小さくて可愛い。

守れて良かったと心から思うと同時に、私は、はっ、と現実に戻された。

私は今、人の多い中庭で、地面に突っ伏した惨^{みじ}めな姿を晒^{さら}し続けている。

しかも大勢の生徒達が近くに集まってきているらしく、急速に周囲が騒がしくなっていた。

あきらかに見世物になっている状態に、顔を上げるのが怖くなる。

そこに追い打ちをかけるようにオリバー殿下の興奮した大声が響いた。

「いつまで横になっているつもりだ、カリーナ！ どうせ、そうやってまた被害者ぶる気なんだろう。このっ、疫病神^{やまがみ}がっ！」

理不尽に罵^{のの}られ、私は息を呑む。

オリバー殿下がさらに地団駄を踏んで続けた。